

《不定期連載》

## 忠雄さんの話

—ある戦中派異端児の語る「あの日、あの頃」 第一話

僕の好きな、あるおじさんの話を紹介したい。名前は忠雄さん、とだけ書いておく。忠雄さんの話、特に昔語りは僕にとって、いつも、とても面白い。だから下手な前口上はやめにして、忠雄さんの話にさっそく、耳を傾けてみよう。なお、物語の主人公である忠雄さんをはじめ、以下、登場人物の敬称は省略させていただく。

忠雄は昭和四年、北海道の歌志内市、神威の桜沢地区で生まれた。忠雄の父はその後、いくつかの仕事を経て、しばらくは歌志内の文殊炭鉱で働いていたが、四十代に入って身体を壊し、町に出て商いを始めた。

その頃、日本はすでに太平洋戦争に突入していた。当時を知る人々が口を揃えて言うところ、「とにかくモノのない」時代である。北海道もまた例外ではなく、その中で父が営んで

いたのは食品から日用品まで、その時に扱えるものは何でも扱う、いわゆる萬屋だった。

三男である忠雄は、二人の兄とともに南瓜やジャガイモを運びながら、一日も早く成長して戦地に赴き、華々しく戦死することを考えていた。どこの家庭も余裕のない時代に、「下の子」として生まれた男子にできる親孝行といえば、早めの戦死以外にない、というのが、いわば当時の暗黙の常識であり、忠雄もまた「そういうふうには込まれた」という。

ところが、である。「これは言わなくてもいいかな」と決まり悪そうに忠雄は言う。「陸軍の試験に落ちたのさ」。歳は十四か十五の頃のことである。発音に難点あり、というのが理由だった。その結果、彼はいわゆる「献身隊」の一員として、東京の軍需工場で働くことになる。

当時、大きなビルは次々と国に没収され、軍需工場と化していた。忠雄が勤めたのは日本光学、現在のニコン・カメラである。日本光学の技術と設備は軍隊用の潜望鏡や双眼鏡づくりにあてられ、そのための工場が東京の大森、品川、大井などに作られていた。忠雄が送り込まれたのはそのうちの大森の工場だ。隣接する料亭もまた没収され、工員のための宿舍となっていた。忠雄はそこで寝泊りし、午前は外で竹槍訓練、午後は工場内での労働という日々を過ごした。この頃、東京大空襲が起り、戦局はすでに悪化し始めていた。忠雄の働

工場の上空にも毎日のようにB29が飛来し、爆撃を繰り返していたという。

そのころの記憶で、とりわけ鮮明なことがある。大森の宿舎から海を隔てて三百メートルくらいのところには、人工の島が作られていた。そこに、イギリス軍の捕虜が収容されているのだと教えられていた。

もともと好奇心が強い忠雄である。その島のこと気がなまって仕方がない。おまけに、怖いもの知らぬ性格でもあった。夜間、幾たびか見張りの憲兵の目をかいくぐり、仲間数人と宿舎を抜け出して、夜の闇にまぎれて島まで泳いでいった。三百メートルという距離をである。

ある時、泳いでいると何やら、水面にぶかぶかと浮かんでいるものがある。周りは真っ暗闇。顔にまとわりつく「それ」が何なのか、わかりはしない。宿舎に戻った翌日の朝、目を凝らして海面を見渡せば、そこには大量の排泄物、つまりウンチが波に揺られていた。

当時はもちろん、水洗便所など存在しない世の中である。その土地では汲み取った大便を、「おわん舟」と呼ばれる簡素な船に乗せて沖へと運び、適当なところでとせとせと海に流すという、まことに原始的な方法をとっていたらしい。忠雄たちとして、それを知らなかったわけではない。だが、その船が出るのはむしろ、珍しいことだったし、それを見かけるの

はいつも、日中の、明るい時間のことだった。しかしその日はなぜか、忠雄たちが海に飛び込む直前に、あるいは、泳いでいる最中にも、「作業」が行われていたらしいのだ。知らぬが仏と言つべきか、忠雄ら悪力キ軍団は、肥溜めの中を若さにまかせてザバザバと泳いでいたというわけだ。

この時に限らず、仲間とともに塀の外への脱出を図ったことは数知れず。つるんでいた仲間のみな、同じ北海道の出身者だった。脱走劇の顛末はいつも同じ。あっさりと連れ戻されては、繰り返し先輩に殴られた。

毎週、日曜日には休みを与えられたが、これと言ってすることもない。ある時、小遣い程度のお金を手に、小田原まで蜜柑を買いに行こうと思ひ立った。なぜ蜜柑か。とにかく食へたくてしかたがなかったのだ、蜜柑が。 (続く)

(堀雅彦)